

Title	ジェンダー・アイデンティティと教育：性的自己形成における遺伝と環境
Sub Title	Gender identity and education : environment and genetics concerning gender self-formation
Author	佐々木, 掌子(Sasaki, Shoko)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2006
Jtitle	哲學 No.115 (2006. 2) ,p.305- 336
JaLC DOI	
Abstract	This paper reviews the environmental factor (family and society) and biological factor (hormones and genetics) concerning the formation of gender identity. After that, from crossover view point between nature and nurture, it will discuss the methodology of behavior genetics, and the findings about the gender identity. So far, a number of studies have revealed that all people have their biological bias, and have challenged the biological dichotomy of men and women. Based on these findings, this paper suggests new gender concept and new point of view about sexuality education. Especially, as regards gender identity formation, it was discussed that we should not dismiss it as just the issue of particular individual (genetics), but deal with as social and environmental issues. The biological, psychological, and sociological research on gender self-formation with the interdisciplinary manner are expected to considerably shake the gender educational concept in the future.
Notes	特集教育研究の現在-教育の統合的理解を目指して- 教育心理学 投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000115-0307

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

投稿論文

ジェンダー・アイデンティティと教育

——性的自己形成における遺伝と環境——

佐々木 掌 子*

Gender Identity and Education
——**Environment and Genetics Concerning**
Gender Self-Formation——

Shoko SASAKI

This paper reviews the environmental factor (family and society) and biological factor (hormones and genetics) concerning the formation of gender identity. After that, from crossover view point between nature and nurture, it will discuss the methodology of behavior genetics, and the findings about the gender identity. So far, a number of studies have revealed that all people have their biological bias, and have challenged the biological dichotomy of men and women. Based on these findings, this paper suggests new gender concept and new point of view about sexuality education. Especially, as regards gender identity formation, it was discussed that we should not dismiss it as just the issue of particular individual (genetics), but deal with as social and environmental issues.

The biological, psychological, and sociological research on gender self-formation with the interdisciplinary manner are expected to considerably shake the gender educational concept in the future.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程（教育心理学）

- I. はじめに：生物学的性別とは何か？
- II. ジェンダー・アイデンティティの形成要因
 - i) 環境の影響
 - a. Money のジェンダー・アイデンティティ研究
 - b. 性別割り当てとジェンダー・アイデンティティ研究
 - c. 家庭環境とジェンダー・アイデンティティ研究
 - d. 社会的な視点とジェンダー・アイデンティティ研究
 - ii) 生物学的な影響
 - a. ホルモンの影響
 - b. 遺伝の影響
 - iii) 遺伝と環境の交流点としての行動遺伝学
- III. ジェンダー・アイデンティティの形成と教育
 - i) 旧文部省（現・文部科学省）における性教育の基本的な目標と内容（抜粋）
 - ii) 旧文部省の性別観とこれからの性別観
 - iii) ジェンダー・アイデンティティと遺伝と教育

I. はじめに：生物学的性別とは何か？

2005年、心理学系の学会発表で、ある報告者が性別適合手術まで考えはじめた女装をする男性のことを「生物学的性別という事実を“性は交換可能”だと万能的に否認し、事実に対する欺瞞を持っている」と表現した。男性だという“生物学的事実”を女性へと変えようとすることは人目を欺きだますことだというのである。ここには、報告者の「生物学的性別に対する絶対視」のみならず、「強固な男女二分法」という信念がある。しかし、果たして“生物学的事実”とは、本当に“事実”なのだろうか。“生物学的に男性”というのは、一体どの状態を指すのだろうか。

東(2003)によると、オリンピックでの性別検査は、古くは医師による性器の観察と内診にはじまったが、その後、性染色体検査が導入され、今ではその性染色体検査でさえも医学的メリットがないため、既に行なわれていないという。これはたとえば、男性の遺伝子型XYを持ち、アンドロゲン不応症(完全型)を持つ人の例でも確認できる。この場合、外性器の形態は女性型であり、第二次性徴も女性型のまま発育し、多くが女性アイデンティティをもつ。ところが、性染色体検査によって、突然「あなたは男性だ」という宣告をされ、しかも女子選手登録までも抹消されてしまうという事態が起こったのである。アンドロゲン不応症をもつ女子競技選手は、一説によると500~600人に一人の割合で見出されるとも言われている。まさに「こうした例により、私たちはセックスの自明性が捏造されていく一端を垣間見ることができる(東, 2003)」のだ。

XY染色体1点、精巣1点、睾丸1点、陰茎1点、髭1点、高身長1点、肌のきめの粗さ1点……と生物学的男性が加点方式で決まるわけでもない。生物学的性別とは一体何であるのかと立ち返ってみると、そこには明白で明確な基準が実際には存在しないということがわかる。

性器の解剖学的な相違は宿命であるとFreud(1925)は書き、臨界期で確立したジェンダー・アイデンティティはその後も変わらないとMoney(1975)は言った。そしてKohlberg(1966)は、ジェンダー・アイデンティティが芽生えればスキーマに沿って性役割を習得すると語った。心理学の主要理論は、その方法論の限界も相俟って、出生後の環境を問題視してきたのである。まるで生物学的な影響は、われわれの範疇ではないと投げ出したかのように。

しかし、性的自己の形成に眼を向けるとき、人間存在を捉えるとき、観念的な、心理的な、社会的な部分だけに光を当て、「性」にどういった生物学的な要因が絡んでいるのかに目をつぶれば、人間存在の厚みをまるで無視することになる。性的自己の形成にかかわる多くの要因を統合するこ

とこそ、われわれが性的自己を捉える最善の方法であろう¹。海外では、このような視点に立った研究が注目を浴びはじめている (Bailey, 2000; Buhrich, 1991; Coolidge, 2002; Hines, 2004a; Knafo, 2005)。

冒頭の、ある報告者の言葉に戻るが、私たちが性的存在というものを理解するためには、生物学的な多様性が存在しているのかもしれないという視点を導入することが、必至である。「生物学的に男性」であるということの意味を問うことから始める必要があるのだ。

性別とは何か。性別はいくつあるのか。性的自己とは何か。性的自己を形成するとはどういうことか。性というテーマを掘り下げて取り扱うことは、われわれの人間存在そのものの前提が揺るがされていく過程だといえる。

II. ジェンダー・アイデンティティの形成要因

ジェンダー・アイデンティティとは、Money (1965) によって、「男性あるいは女性、あるいはそのどちらとも規定されないものとしての個性の統一性、一貫性、持続性」と定義されている。それはたとえば、ある個人における10年前も男性であり、今も男性であり、50年後も男性であろうと思うといった、時間軸的な一貫性の感覚のことでもあり、また、自分を男性だと思い、他者も自分を男性と思っているだろうと思い、そして男性として現実の社会の中で生きているといった、他者や社会も含めた統一的な感覚のことでもある。

¹ Freud は神経学、Money は内分泌学の専門家であり、生物学的影響を軽視していたわけではないが、彼らの理論はもっぱら出生後の環境的要因に着目する傾向がある。

i) 環境の影響**a. Money のジェンダー・アイデンティティ研究**

1950年代から、Money はインターセックスに関する研究に着手していた。そして、105名のインターセックスの研究において、100名が割り当てられた性別と養育上の性別のまま暮らしていることを発見した。このことから Money は、割り当てられた性別と養育上の性別は、染色体の性別、性腺の性別、ホルモンの性別、補助的な内部生殖形態や外性器の形態よりも、ジェンダー・ロールを一貫してはっきりと予知しうる信頼できる予測変数だという結論に至ったのである (Money, 1957)。そして Money はジェンダー・アイデンティティを「話し言葉を習得するのとほとんど同じ方法で習得される (Money, 1975)」ものだと考え、ジェンダー・アイデンティティの「臨界期 (生後 18 カ月～24 カ月) 説」を提起し、その時期に割り当てられた性別は不可逆的なものであると主張した。

性同一性障害を持つ者に対しても Money (1975) は以下のように説明している。「出生前の互いに矛盾なく統一したあらゆる性的決定要因が、そのレットル (性別) の方向へと導いたにもかかわらず、彼らは性自認の分岐点で別の道に進んだ。手元にある証拠はすべて、この矛盾した方向転換が社会からのひそやかな合図によって促されたもので、生後間もない時期に主に母親を通して伝えられることが多い、という結論を指摘している (() 内は筆者)」。そして、解剖学的にもホルモンの点からも、「正常な幼児に対しては、出生時に性自認の選択の自由が与えられていること、そして少なくとも生後 1 年半までは社会的影響力が決定的に関与する」として、遺伝的にも身体形態も男児の一卵性双生児が、一方は男児として、もう一方は生後 17 カ月以降から女児として養育されたところ、女児として育てられたほうはその後女児としてのアイデンティティを持続させていた例を根拠として挙げてい

る²。

Money が強力な環境支持者のように受け取られる傾向にあるのは、「ジェンダー・アイデンティティは、氏と育ちのどちらかが独立して作用するのではなく、両者が発達分化の臨界期において相互作用することによってつくられる (Money, 1985)」と「臨界期」の重要性を強く打ち出しているからであり、「性自認が分化をするこの段階期では、染色体やホルモンや性器や個体がどのような状態にあらうとも、社会的圧力のほうがジェンダー・アイデンティティを決定する影響因として大きい (Money, 1975)」と述べているためである³。

b. 性別割り当てとジェンダー・アイデンティティ研究

Bradley, Oliver, Chernick & Zucker (1998) の研究では、遺伝的にも

² Money が証拠の一つとして挙げた一卵性双生児の症例については、解剖学や生殖生理学の研究者である Diamond (1982) が、異論を唱えている。彼はイギリスの BBC 放送局のドキュメンタリー番組の追跡調査をきっかけに、Money が根拠にしていた事例の 1 つである双子の症例に反論をした。追跡調査では、女性アイデンティティを発達させたとした子どもは、思春期を過ぎて男性として生活をしており、女性と結婚していたということが明らかとなったのである。この双子をめぐる一連の動向は、書籍『ブレンダと呼ばれた少年 (Colapinto, 2000)』に詳しい。Diamond (1996) は、ジェンダー・アイデンティティ発達を理解は、パラダイムシフトをしており、過去の「生まれたときは中性で、その後の養育でジェンダー・アイデンティティが発達する」という学習パラダイムから、「出生前から生来的な傾向つまり男性か女性かのアイデンティティへの偏向がある」という氏と育ちの相互作用パラダイムへと変化していると述べ、再度 Money への反論をしている。

³ Money の論文は多数あり本稿ですべてを追うことはできないが、後年、特に 90 年代に入ってから「すべての発達段階で、純粋に nature だけだとか、nurture だけだとかいうことはない。…刷り込み学習は、脳で固定され、生涯残るよう“忘れる unlearning”ことに抵抗していく。いったん刷り込みが脳に固定されればそれは nature として機能し、nurture ではなくなる。どのように発生したかに関わらず、脳の生物学的な構成物となるのである (Money, 1995) と述べていたり、「nature needs nurture (Money, 2002)」と述べていることを付け加える。

身体形態も男児として生まれた子どもが、生後2カ月の時にペニスを喪失したため、性別の再割り当てと性腺摘出手術を7カ月の段階で行なった事例が紹介されている。その後の追跡調査では、26歳の段階で、彼女は女性のジェンダー・アイデンティティを発達させていた。これは、遺伝的な性別やその他、外内性器よりも、生後の性別割り当てとそれへの養育こそが、彼女のジェンダー・アイデンティティを形成したと考えられる事例である。

先天性副腎化形成症 (congenital adrenal hyperplasia, CAH) を対象にした調査からも、環境要因の強さが明らかになっている。遺伝的にはXX型女性でCAHをもつ人の場合、胎生期にアンドロゲン・ステロイドを過剰生産するために、性器の男性化が引き起こされる。出生時、多くのCAH児は女兒と割り当てられるが、それを不快だと思っているCAH児はほとんどおらず (Ehrhardt & Baker, 1974; Berenbaum & Bailey, 1998; Zucker, 1999)、さらに、158名のCAHのうち9名が男児と割り当てられ、男児として養育されていたという報告では、その後も明らかな問題を持っていないとのことであった (Mulaikal, Migeon & Rock, 1987)。これは、女性の染色体と内部生殖体系を持っていたとしても、男性アイデンティティが作りあげられていくことを示している。CAHの研究で見える限り、ジェンダー・アイデンティティの発達は、主に養育上の性別にしたがって分化していくようである。

c. 家庭環境とジェンダー・アイデンティティ研究

Freudにはじまる精神分析理論では、家族力動を検討材料に入れたものが中心となり、男児は父親と、女兒は母親との同一化を通じて、ジェンダー・アイデンティティを発達させていく、というのが基本的な捉え方である。Freud (1925) は「性の発達の男性と女性との差異は、性器の解剖学的な相違およびこれと結びついた心的状況の一つの明白な帰結であっ

て、これは実現した去勢とただ脅かしだけにとどまっている去勢との差異に対応しているのである」と、その契機を身体の差に求め、男根期における去勢不安とペニス羨望がジェンダー・アイデンティティを確立させるとした。同じく精神分析家として臨床場面での事例から精神分析的にこのテーマを研究していた Stoller (1977a, 1977b) は、ジェンダー・アイデンティティの形成要因について、生物学的な要因に加え、両親や医師の性別の割り当てと、両親の態度、乳児を取り巻く習慣的パターンとしての条件づけ、刷り込み、学習、とりわけ性器に対する身体自我と精神内発達という6項目を挙げている。

Freud (1905) が、「倒錯への素因は、人間の性衝動の起原的・一般的な素因であり、そしてそれから成熟の過程で気質的な変化と心理的抑止を受け、正常な性的な振る舞いが発達するという観点をどうしてもとらねばならなくなった。われわれは起原的な素因が幼児期にあると考えた⁴」と述べているように、生物学的な性別には問題がない⁵とされる性同一性障害の研究では、彼らの養育上の影響に研究の焦点が当てられる傾向にある。

特に臨床研究ではしばしば親子関係から性同一性障害の原因を探ること

⁴ 遺伝に関して Freud は、同じ論文の中で「別の因子が作用しなくても必ず異常な性生活を作り上げるに違いないような根源的な素因の変異もまた確かに考えることができる。そのときわれわれはそれを“変質的な”素因とよび、遺伝による悪化の表れと見なすことができる」と述べ、彼の患者の重症例の半数以上が、父親が梅毒でありながら本人は遺伝梅毒の身体的徴候を持っていなかったことを挙げ、「異常な性体質は梅毒の遺伝の支脈の中では最後のものと考えべきだ、とはっきり言いたい」と書いている。

⁵ 針間によると「1950年代、性同一性障害（当時は性転換症 transsexualism と呼ばれた）が研究されはじめた当時、半陰陽とは違い、明確な身体上の特徴は見いだされなかった。そのため性同一性障害の原因は、もっぱら両親との関係、育てられ方、社会的要因などの後天的なものが考えられた。このことより、当時は性同一性障害の概念定義として、「性同一性障害は生物学的には完全に正常である」といった条件があったという歴史的経緯がある。しかしながら、その後の研究では性同一性障害の原因の一つとして、脳の性分化異常が基盤にあるという考えが研究者の間では主流となっている（<http://www.harikatsu.com/>より転載）」。

が行われている。たとえば、少年が女兒としてのアイデンティティを持つことに関する研究として、娘をもつことへの母親の希望や父親の不在があったとした Charatan & Galef (1965) の研究⁶ や、息子の初めての女性的行動に対する両親の寛容さがあるとした Roberts *et al.* (1987) の研究⁷、女性的行動の強化および断念させることの欠如が性別問題を引き起こし永続させるとした Green (1974, 1987)⁸ などの研究が挙げられる。

また、性同一性「障害」であるために、そこには何らかの家族内「病理」が存在すると仮定する研究も多い。たとえば、Rekers, Mead, Rosen, & Brigham (1983) では、母親の 80%、父親 45% が精神科受診しているという報告がなされ、Wolfe (1990) は、12 人の性同一性障害をもつ子どもの父親の全員が精神疾患を持っていると報告し、女兒に同一化する少年には男性役割モデルが少ないと示した。また、Marantz & Coates (1991) は、境界性人格障害の母親を持つものは、control 群は 17 人中誰もいなかったのに対し性同一性障害をもつ群では 16 人中 4 人いたという報告をし、Coates (1990) は、性同一性障害をもつ子どもの母親の多くが慢性的な家族機能障害、あるいは子どもが 3 歳になるまでに外傷体験を持つ、と主張し、子は母と自己を融合させる修復的なファンタジーを持つことで母親を失う恐怖に打ち勝とうとしているのだと理論化した。

病理とはいかないまでも、男性から女性へと移行する性同一性障害を持つ者 (MTF) は、父の子育ての関与や世話が少なく、女性から男性へと移行する性同一性障害を持つ者 (FTM) は、母の子育ての関与や保護が少ないとする研究 (Tsoi, 1990) や、性同一性障害を持つ者の両親は温かみがなく拒絶的であり、離婚率も高いという報告などもされている

⁶ control 群との有意差はなかった (Roberts *et al.*, 1987).

⁷ control 群が女装をしないため、control 群を設定できないという批判がある (Zucker & Green, 1992).

⁸ 原因なのか結果なのか明らかではないという批判がある (Zucker & Bradley, 1995).

(Cohen-Kettenis, 1990). また, control 群よりも性同一性障害を持つ群の少年は「魅力的」, 「美しい」と一般的に評定され, また性同一性障害をもつ群の少女は「ハンサム」, 「男性的」と評定されるため, 外見が両親の感情や行動のトリガーとなるとした研究もある (McDermid, Zucker, Bradley, & Maing, 1998).

きょうだい環境についての報告としては, 男性から女性へ移行する者 (MTF) は, 男きょうだいが多く (Zucker, 1997), 出生順位は第 2 子以降が多いということ (Green, 2000), 女性から男性へ移行する者 (FTM) では, 女のきょうだいがいる場合, 先に生まれている傾向が高い (Zucker, 1998) という報告がある. これらの結果は, もちろん, 生物学的な要因とも絡んで考察されるべき知見である.

また, 非典型的なジェンダー・アイデンティティに関する研究ではないが, こうした同性の親への同一視という観点からは, Munsinger & Rabin (1978) が, ジェンダー・アイデンティティの家族内類似性を調べ, それを, 相加的遺伝モデルなのか, 伴性遺伝仮説なのか, 同性同一化理論なのかを検討している (ただし, 実際に測定しているものは, 性役割志向を択える, 性役割パーソナリティテストや嗜好性テスト). その結果, 104 家族のサンプルにおいて, 父-息子の相関係数が $r < .263$ ($p < .004$), 母-娘が $r < .325$ ($p < .001$) であり, その他の組み合わせでは有意な相関は得られなかった. したがって, 娘は母から, 息子は父から性役割を学習するといった同性同一化理論が採択されている.

d. 社会的な視点とジェンダー・アイデンティティ研究

Bem (1993) によると, 「過去 50 年間に社会科学の研究分野で主流を占めてきたジェンダーの社会的形成に関する理論的視点は, 社会化, 社会構造による状況的拘束, 精神力動的な葛藤, 個人のアイデンティティ形成を強調している. 1 番目と 2 番目は文化が個人に及ぼす影響を強調し, 3 番

目と4番目は個人の心理の中で生じる問題を強調する」という。社会学者や人類学者が社会構造から性別がいかにかに社会化されているのかを解き明かしていく一方で、心理学者は、個人がもつ性別に対する意識や行動を対象にしてきた。

社会的学習理論では、Mischel (1966, 1970) や Bandura (1977) らが、「分化強化」と「モデリング」の理論を提唱してきた。Perry & Bussey (1979) によると、子どもは、多くの男性や女性、男の子や女の子を観察することで、女性はよく行おうが男性がめったに行わない行動あるいはその逆の行動がどんな行動であるのかを知り、男性に適切な、あるいは女性にふさわしい行動を学んでいくという。つまり、自分の性別に典型的だとその子どもが見なした行動をモデリングするのである。そして、何が適切なのかを判断するにあたって、親などが適切な性役割をとれば報酬を、不適切であれば罰を与えることで、分化強化が促され、それに伴いジェンダー・アイデンティティが確立されていくと考える。その後、社会的学習理論は、より複雑な理論を展開していく。Bussey & Bandura (1999) の理論では、モデリングや行動化経験や直接教育を促す家族の影響よりも、職業システムなどの性別化された慣習といった社会構造による影響のほうに着目している。

認知発達理論では、Piaget の理論を援用した Kohlberg (1966) の説明が著名である。それによると「(性アイデンティティの発達) 明らかに、子どもが『男の子』『女の子』というレッテルを聞かされ、学習することから始まる。これはごく幼児期に起こり、普通2歳の後半であり」、「3～4歳の子どもにとっては、自分がどちらの性の一員であるかという性アイデンティティはきわめて揺らぎやすいものであり」、「子どもが性の定義を確立するのは大変難しく、一般的な物理的概念の定義を確立する困難さときわめて似ており、後者が解決されるにつれて、前者もまた解決される」という。つまり子どもは、時間が経過したとしても、事態(外見など)が変化したとしても性別は変わらないという恒常性を理解するようになって

から、自己の性別を同一視し、それに一致した性役割取り込みを行うことでジェンダー・アイデンティティを発達させていくのである。また「子どもの性アイデンティティは、即物的・社会的現実に対して適応しようとする動機と、安定したよい自己イメージを維持したいという動機によって維持される」とジェンダー・アイデンティティをもつ動機が、内発的な力によるものであると述べている。

このように社会的な学習をしながら発達していくさまを追うという研究では、社会のプレッシャーに対峙する個人という枠組みが多く、ジェンダー・アイデンティティが日々周囲から社会的に“つくられていく”ものであることを強調している⁹。それは以下のような主張からもうかがえる。「人々は自分の男らしさまたは女らしさの感覚をそのままに保とうとして、自分がたまたま持つことになったジェンダーに相応しい行動及び特徴を用いて、ジェンダー・アイデンティティを確認しようとしている (Spence, 1985)」, 「男女を排他的なものとする生涯にわたる文化的圧力や要請がこうした感覚 (筆者注: 男 (女) らしくあるように努力しなければならないという感覚) を常に助長してくる (Bem, 1993)」。

ii) 生物学的な影響

a. ホルモンの影響

以下に述べるインターセックスの事例は、ホルモンがジェンダー・アイ

⁹ 特にジェンダー・スタディにおいて日本でも影響力の強い Butler (1990) のような社会学的な視野を持った研究者は、ジェンダー・アイデンティティという概念に対して、個人よりも社会に重きを置き、以下のように述べている。「『ひと』の『首尾一貫性』とか『連続性』というのは、ひとであるための論理的、解剖学的な特性ではなく、むしろ、社会的に設定され維持されている理解可能性の規範なのである。(中略) …したがって、不動の実体とか、ジェンダー化された自己という見せかけ——すなわち心理学者のロバート・ストラーが『ジェンダーの核』といったもの——は、さまざまな属性を、文化的に確立された首尾一貫性のラインにそって規制することで生産されているものに過ぎない」。

デンティティに及ぼす影響因として大きいことを示す研究である。

Imperato-McGinley (1979) の報告は、性染色体は男性型である XY だが、 5α 還元酵素欠損というアンドロゲンの非典型状態によって性器が女性化するため、生誕時、性別を「女性」と割り当てられたインターセックス児 18 人についてである。その中の 16 人が、思春期以降にジェンダー・アイデンティティが女性から男性に変わったという。また、7 人中 4 人という報告もある (Mendez, 1995)。これは Money の主張する「ジェンダー・アイデンティティの臨界期説」を否定するデータであり、また、思春期発来とともに、テストステロンの分泌が増加し、身体の男性化も起こったため、男性ジェンダー・アイデンティティが発達してきた例だと考えられている。なお、この酵素の遺伝子はつきとめられており、Imperato-McGinley らのチームによって、遺伝子配列も解明され、この酵素欠損の原因も同定されている (Thigpen *et al.*, 1992)。

Hines *et al.* (2003) は、先天的にアンドロゲンが過剰に分泌される CAH (先天性副腎化形成症) の女性を対象にし、コア・ジェンダー・アイデンティティに関して質問紙調査をおこなっている。その結果、CAH をもつ女性は統制群の女性よりも有意に典型的男性役割行動をとることが明らかとなったが、ジェンダー・アイデンティティに関して言えば、5% 水準の有意差であり、性役割に比べればアンドロゲンの影響は弱いという結果が得られている。同様に、Meyer-Bahlburg *et al.* (2004) は、CAH をもつ女性にジェンダー・アイデンティティに関してインタビュー調査をした結果、性役割に関しては統制群よりも典型的男性役割行動をとっていたが、ジェンダー・アイデンティティに関しては違和感がないことが明らかとなった。ここでは、アンドロゲンが、性役割行動には影響を及ぼしうるが、ジェンダー・アイデンティティにはあまり及ぼしうるものではないことが示唆されている。

また、Hines (2004, b) は、先天的にアンドロゲン受容体遺伝子が欠乏

する CAIS (完全型アンドロゲン不応症) をもつ男性遺伝型 XY の人々を対象にし、コア・ジェンダー・アイデンティティに関する質問紙調査をおこなっている。その結果、統制群の女性との有意差は認められず、女性としてのジェンダー・アイデンティティをもっていることが明らかとなった。この結果から、心理的な性的分化の決定に、アンドロゲンが染色体上の性別である XX や XY をくつつがえしうる (Hines, 2004 b) ことが示されたのである。

Reiner & Gearhart (2004) は、総排泄腔外反症をもつ人々のジェンダー・アイデンティティを追跡調査している。総排泄腔外反症とは、胚形成時の骨盤の複合欠損であり、遺伝的には XY をもつ男性でありながら、重篤な陰茎発育不全や陰茎欠損を併発する状態をさす。陰茎発育不全の問題に対処するため、多くは女性と割り当てられてきた。調査では彼らのクリニックに来院した 5~16 歳の遺伝的には男性である 16 名が評価された。14 例は、新生児期に社会的・法律的に、そして外科的処置を行って性別を女性とし、残る 2 例の両親はこれを拒否した。その結果、性別を女性とされた 14 例の対象者のうち、8 例がこの研究の過程で自分は男性であると申告し 6 例が性別も変えた。一方、男性として育てられた 2 例は男性のままであった。5 例は女性として生活しているが、そのうち 3 例は、ジェンダー・アイデンティティが曖昧な状態で生活しており、そのうち 2 例が自分は男性であると申告していた。この結果は、アンドロゲンがジェンダー・アイデンティティの主たる生物学的要因であるようであるが、これを唯一の要因であると言いきることもできないというものであった。

Zhou *et al.* (1995) は、性同一性障害の MTF (male to female: 男性から女性へ性別移行する者) 6 名、異性愛男性 15 名、同性愛男性 9 名、異性愛女性 11 名の視床下部を調べている。調査対象は、分界条床核と呼ばれる神経核である。分界条床核とは扁桃体と関連の深い神経細胞群であ

り、通常、男性のものは女性と比して有意に体積が大きい（約 2.5 倍）ことが知られている。その結果、この体積の大きさは、女性・MTF < 男性・同性愛男性であった。つまり、これは性指向が関係する神経核と、ジェンダー・アイデンティティが関係する神経核が異なることを示しており、また、ジェンダー・アイデンティティが反応する部位が1つ特定されたことを意味する。ただし、MTF は全員エストロゲンを持続的に投与し、性別適合手術を受け、精巣も摘出済みであるため、MTF の分界条床核が生得的に女性と同じくらいの大きさなのか、それとも出生以後女性と同じ大きさになったのかは明らかではない¹⁰。その後、Kruijver *et al.* (2000) は、FTM (female to male: 女性から男性性別移行する者) も含めた研究を行ない、男性 (9 名) と男性同性愛者 (9 名) に大きさの違いは見出されなかったということ、MTF (6 名) の大きさは女性 (10 名) と似ていたということ、そしてFTM (1 名) の大きさは男性と変わらなかったということ、副腎皮質の癌やターナー症候群といったホルモン関係の障害を持った人々 (6 名) の大きさとの比較からホルモン治療やホルモンレベルは分界条床核に影響は及ぼさないこと、といった結論に達している。

生物学的な志向性を持つ研究者の場合、ジェンダー・アイデンティティの形成要因について「おそらく脳の中に固定されている (Swaab *et al.*, 1992)」と捉えるため、文化的、社会的、心理的影響については目を向けない傾向もある。

b. 遺伝の影響

1990 年になって、ついに精巣決定遺伝子である SRY を取り出すことに成功して以来、遺伝子研究では遺伝子がヒトの性分化にどのように影響するのか、どの遺伝子がどのホルモンに作用するのかについて検討が加え

¹⁰ 前立腺癌の治療のため精巣摘出手術を受け、その後エストロゲンの投与を受けた男性には分界条床核の大きさの減少はみられなかったというデータはある。

られている。しかし、特定の遺伝子がジェンダー・アイデンティティに関連しているという報告は2005年現在、まだない。

したがって、遺伝研究はもっぱら双生児や家族同胞例に関する報告によって行なわれてきている。トランスジェンダーなどの非典型的なジェンダー・アイデンティティについての双生児一致例では、Hyde (1977), Stoller (1976), Sedehghi (2000) などの研究が挙げられる。また、Green (2000) の研究では、ロンドンのジェンダー・アイデンティティ・クリニックでの報告としてさまざまな例が挙げられ、MTFの一卵性双生児の一致が1例、男きょうだい的一致例が3例、男女きょうだい的一致例が1例、女きょうだい的一致例が1例、父と息子的一致例が1例、性別違和をもつ性同一性障害の父とトランスヴェスタイトの息子1例、性別違和を持つトランスヴェスタイトの父とトランスヴェスタイトの息子1例、トランスヴェスタイトの父とトランスセクシュアルの娘、という10の事例報告がされている。2人きょうだいがいる家族の中で男性双生児もしくは2人きょうだいの非典型的ジェンダー・アイデンティティが一致する確率は1億分の1であるにもかかわらず、Greenらの1,500のサンプルから得られた家族同胞例の一致率は不自然なほど高いものであり、何らかの遺伝の影響が示唆されている。

日本では、阿部(1999)が一卵性の双生児のFTMの一致例と二卵性のMTF不一致例を報告している。また、佐藤ら(2003)は、岡山大学医学部付属病院を受診した性同一性障害例328名から、1組のFTM一卵性双生児一致例、3組のFTM不一致例(卵性は明らかではない)、そしてFTMで3組のMTFで1組の、同胞一致例を報告している。

Masia, Money & Ehrhardt (1971) や Money & Ogurno (1974) は、完全アンドロゲン不応性症候群(AIS)の場合、遺伝型がXYであるとしても、生後女性と割り当てられれば、女性ジェンダー・アイデンティティをそのまま発達させると論じていたが、それを反証する事例がGoorenら

(1991)によって報告されている。完全アンドロゲン不応性症候群(AIS)は、性染色体はXYであるが、アンドロゲンに対して感応せず、そのため生殖器は外見上女性的になる。思春期になると、乳房が発達し、成人女性と同じようなみかけになる。しかし月経はなく不妊である。事例報告の彼は生後5日目に女性と割り当てられ、その後睾丸摘出、ホルモン投与を行い女性として生活をしていたが、30歳になったときに、性別適合治療を行ったという。この事例は、アンドロゲンが通常レベル以上に低くとも、男性ジェンダー・アイデンティティや女性への性指向が発達しうるということを示すので、養育よりもホルモン環境よりも、遺伝がジェンダー・アイデンティティにもっとも影響を及ぼした例として挙げるができる。

iii) 遺伝と環境の交流点としての行動遺伝学

ジェンダー・アイデンティティの形成をめぐるこれまでのさまざまな研究では、それぞれの研究法の限界のために歩み寄れない状態にあったといえる。遺伝も、ホルモンも、脳も、家庭環境も、教育も、社会構造も、それぞれジェンダー・アイデンティティに影響を与えているということは多くの研究者の同意が得られているところでもある。しかし、今までは、内分泌学者がホルモンの研究をし、臨床系や発達系の心理学者が家庭環境の研究をし、社会学者が社会構造を解くという棲み分けがあり、その結果、個々の要因に迫ることはできたが、その要因同士の影響を明らかにするには限界があった。この橋渡しを行なっているのが、「行動遺伝学」という方法論だといえる。

以下、行動遺伝学的手法を使ったジェンダー・アイデンティティ研究を紹介する。

Buhrich, N., Bailey, M. & Martin, G. (1991) は、19歳～40歳までのオーストラリアの男性双生児(95組の一卵性双生児と63組の二卵性双

生児)を対象にして、彼らのジェンダー・アイデンティティを研究している。その結果、ジェンダー・アイデンティティは、幼少期においても、成人期においても家族間で作用する要因の影響も遺伝の影響も受けず、独特の環境要因によって説明されること、また、基本的に同じペア間は相関しないことが明らかになっている。しかし、典型的な性役割行動ではこの寄与率が異なり、幼児期においては、家族で共有される環境要因の寄与率が46%を占め、遺伝が10%寄与し、残りの44%が個人独特の環境によって説明され、成人期になると、家族で共有される環境要因の寄与率は2%まで減少し、遺伝の影響が30%にまで増え、残りの68%が独特の環境によって説明されるようになる。このことから、ジェンダー・アイデンティティと性役割は別個のものとして捉えるべきであるということ、幼少期の典型的な性役割行動は家庭での影響を受けること、しかし、成人期になると個人独特の環境で形作られていることが明らかとなった。

その後、Bailey, M., Dunne, M. & Martin, G. (2000) は、女性双生児も対象に加え、研究を進めている。対象は、一卵性双生児の男性が312組、二卵性双生児の男性が182組、一卵性双生児の女性が668組、二卵性双生児の女性が376組、異性の二卵性双生児が353組であり、年齢の中央値は29歳であった。その結果、幼少期の典型的な性役割行動については、Buhrich, N., Bailey, M. & Martin, G. (1991)の研究とは異なり、家庭で共有される環境の影響はなく、遺伝の影響(男性:.50, 女性:.37)が見出され、残りは個人独特の影響(男性:.50, 女性:.64)で説明された。一方、ジェンダー・アイデンティティ(項目例「多くの点で、私は男性よりも女性に似ていると感じる」など)については、Buhrich, N., Bailey, M. & Martin, G. (1991)の研究ではほぼ遺伝の影響は見出されなかったが、この研究では寄与している(男性:.31, 女性:.24)。とはいえ、Buhrich, N., Bailey, M. & Martin, G. (1991)の研究と同様、非共有環境の影響が大きかった(男性:.69, 女性:.67)。

Coolidge, F., Thede, L. & Young, S. (2002) の研究では、小児・思春期の双子サンプルを対象に性同一性障害の遺伝率を算出している。この尺度は、「小児・思春期における性同一性障害」の DSM-IV 診断基準に基づいた質問紙であるため、ジェンダー・アイデンティティに関する質問紙というよりかは、異性役割行動をとり同性役割行動を嫌うかどうかに関する内容であると思われる。対象者は4歳～17歳までの双生児で、一卵性双生児が96組、二卵性双生児が61組であった。その結果、2.3% にその徴候が見られ、相加的遺伝の影響は62%、非共有環境の影響は38%であった。この結果は、Bailey, M., Dunne, M. & Martin, G. (2000) の研究結果と同じく、家庭内で共有される環境の影響は寄与しないというものであるが、Buhrich, N., Bailey, M. & Martin, G. (1991) と Bailey, M., Dunne, M. & Martin, G. (2000) の研究と比較すると、もっとも遺伝率が高い。

膨大なサンプルから、3歳、4歳児の子どもの非典型的性役割行動について遺伝と環境の影響を研究したのが Knafo, A., Lervolino, A. & Plomin, R. (2005) である。彼らは5,799組の双生児サンプルの中で、非典型的な性役割行動をとる対象児だけを選出した。そして対象児を、完全に異性役割だけを取る群と、異性役割も同性役割も取る群とに分類した。その結果、女兒においては、後群は遺伝および双子の二人がともに共有している環境（共有環境）要因との効果で非典型的性役割行動が説明されたが、前群は、分散のほとんどを遺伝が説明し、共有環境の効果はなかった。一方、男児においては、どちらの群も共有環境の効果がもっとも寄与していた（共有環境は.49～.60、遺伝は.21～.32）。

現在までの行動遺伝学によるジェンダー・アイデンティティ研究から見えてくるのは、小児・思春期と成人期では、遺伝と環境の寄与率は異なるようであるということ、またジェンダー・アイデンティティと性役割行動の寄与率も異なるようであるということである。そして臨床系や発達系の心理学研究がもっとも重んじてきた家庭環境の影響であるが、上記の結果

を見る限り、幼少期の男児の典型的性役割行動にのみ、影響があるようであった。逆に言うと、家庭環境の影響は、ジェンダー・アイデンティティに及ぼす効果はなく、また成人期の典型的性役割行動に対しても効果が見出されたという研究はまだない。このたった4つの研究を振り返るだけでも、臨床や教育現場に与える影響はあまりに大きい。

III. ジェンダー・アイデンティティの形成と教育

ジェンダー・アイデンティティは、生涯にわたり形成していくものであるが、特にこれが問題となりやすい時期があると言われている。それが、思春期と更年期である。いずれも身体的な変化、特にホルモンバランスに著しい変化が訪れる時期である。

旧文部省が作成した「学校における性教育の考え方、進め方(2000)」では、ジェンダー・アイデンティティという用語こそ出ていないものの、ある性別に対する自己認識の確立が、性教育の目標の一番初めに掲げられている。急激な性成熟の訪れのある思春期においては、義務教育期間であることもあり、生徒の性的自己を確立するということは学校が取り組む課題だと捉えられている。以下、旧文部省のジェンダー・アイデンティティへの取り組みとその方法に関する部分について抜粋する。

i) 旧文部省（現・文部科学省）における性教育の基本的な目標と内容 （抜粋）

学校における性教育の基本的な目標

ア) 男性又は女性としての自己の認識を確かにさせる

人間は他の動物と違って、ただ生命を維持し種族を残すというだけでなく、人間としての生活を営み、幸福に生きようとする。この場合、人間は男か女かという事実（生物学的性）や男になることや女になること（心理

的、社会的、文化的性)をどう理解し認識しているかによって生き方に差異が生ずる。このことから、人間の生物学的性や心理的、社会的、文化的性について理解を深めさせ、自己の性に対する認識をより確かにさせる必要がある。

学校における性教育の内容（自己の性を確かにするために必要な内容）

性に関する意識や価値観、あるいは男女の行動様式が多様化している中において、児童生徒などは核家族、少子家族で、豊かな物質に恵まれ、過保護・過干渉に育てられていることが多い。また、進学競争に追われていることや地域社会にあった自然発生的な子どもの集団活動が減少したことなどから、人間関係が希薄になっている。そのため、男性又は女性としての自己を確かめる場や機会を失っていることから、自尊感情（セルフエスティーム）が得られず、男性又は女性としての自己の確立が困難になっているといえる。

さらには、我が国では、古い時代の家父長制度や性別分業が残存していて、それによってつくられた固定的な性役割観やそのために生じた性差別が児童生徒などに伝承されていることや、性に関する社会的風潮や商業主義的な性情報などによって、性に対する享乐的、消費的イメージが与えられていて、自己の性に対する認識や他の性に対する理解を誤っていたり、不適切である場合もある。

これらのことから、学校における性教育は、発達段階に応じて次のような内容を取りあげることによって、自己の性に対する認識を確かにさせるとともに、異性に対する理解を深めさせることが大切である。

①人間に性別があるのは生命を再生産するためであるという基本的な理解の上で、性について学ぶ基本的な内容については、発達段階に応じて、新しい生命は両親によって生まれること、新しい生命を生む体に成長しても

まだ親になれないこと、生殖の仕組みに関すること、人間は新しい生命を生む生まないの選択ができること、性感染症予防など性と健康に関することなどの知識や能力などがある。この場合、生命尊重についても理解させる必要がある。具体的には、人間は他の動物と違って単に生命を維持し、種族を残すというだけでなく、人間としての生活の中でどう生きるかという生命の尊さが問われることなどを扱うようにする。

②身体的、生理的側面から自己を認識させる内容については、幼年期には男女の外性器の違いから生ずる興味、関心や素朴な疑問に対応する内容、思春期には身体的な発達・変化や性的成熟、発達段階に即した生殖の仕組みに関する内容、更にはこれらについて理解を深め、自己の性を肯定的に受容できるようにするための内容などがある。この場合、人間尊重の精神を培うという見地から、すべての人間が人間として尊重されなければならないということを理解させることが必要である。

③思春期になれば、身体的精神的な発達や変化によって、関心が自己に向けられ、容姿に敏感になったり、不安が生じたりする。具体的には性ホルモンの分泌が活発になり、身体の内部環境が変化するため、情緒が不安定になる。さらに、異性に対する関心が高まり、性衝動が発現するようになるが、羞恥心や未知の経験に対する不安や戸惑いから、その言動に試行錯誤的な複雑な表現をするようになり、様々な不安や悩みが生じたりする。それが性の逸脱行動へと発展することもある。これらのことから、性の心理的発達やそれによる不安や悩みについて理解し、個人的適応を図るとともに、他人を思いやる信条を育てる内容が必要である。

④人間は生まれたときの性徴によって、男か女かのいずれかとして扱われるが、その場合、たんなる生物学的な男女ではなく、心理的、社会的、文化的な意味を含んだ性別による接し方やしつけがなされている。子どもはそうした接し方を受け入れることで性役割観を持つようになり、それによって自分や他人を認知し、性別の行動を学んでいくものである。こうし

て育てられた自己の性に対する認識や異性に対する理解が、自分の生き方や異性との人間関係に大きな影響をもたらす。このため、人間は生まれながらに様々であり、それぞれの生き方を尊重しなければならないことや固定的な性役割観によって生ずる性差別に気づかせることにより、男女が人間として平等の立場でお互いに人格を尊重し合って生きていくことの大切さを理解させることが必要である。

ii) 旧文部省の性別観とこれからの性別観

上記に示したように、旧文部省は、性的な自己の確立が困難となっている要因について、①性に関する価値観の多様性、②核家族・少子家族での過保護・過干渉な養育、③進学競争や地域社会での子どもの集団活動の減少による人間関係の希薄、④家父長制などの性差別的意識の残存、⑤性商業主義的性情報による享乐的・消費的イメージなどを挙げている¹¹。

したがって、性的自己の確立のためには、人間関係を濃くし、男性としてのあるいは女性としての自己を確かめるような機会を増やし、また異性関係へのイメージを適切にもたせ、自尊心を高めるように促すことが求められているようである。

つまり、旧文部省の性別観は、「性別二分法に則りながらも、固定的な性役割観は差別につながるのを、平等で尊重しあえる男女関係を理解させることで自己の性別が確立される」というものであり、自己の性別の認識を確立させるためには、生殖・身体・生理・心理発達を“教え”，固定的性役割に“気づかせる”という姿勢が見られる。

この旧文部省の性別観に対して、これまでの学問知見をふまえた新しい性別観を述べる。

¹¹ 特にエビデンスについては触れられていない。

1) 生殖器の性別に基づいた性別二分法に対して

インターセックスの例を挙げるまでもなく、遺伝的にも発生学的にも内分泌的にも性別は連続的である。性教育の場面で、性別は生殖器に基づいた二つであると教育していれば、この二分法に収まりきれない人間に対し、恐れ、同情、軽蔑、あるいは逆に不自然な崇拜の感情が芽生えるのは当然の帰結である。

Diamond (1997) の言葉を紹介する。「インターセックスは、生物学的多様性の中のひとつであり、非典型的ではあるが生物学的には理解しうることであり、正常である。病的発達、未発達、発達の誤り、欠陥のある性器、異常、自然の失敗、ではない」のだ。トランスジェンダーや性同一性障害に関しても同様である。

2) 性指向に関して、異性愛を前提にしていることに対して

性指向に多様性があることもキンゼイ・レポート (1948, 1953) 以来、共有された学問的知見である。この影響因に関しても、行動遺伝学から遺伝と環境の影響の大きさが明らかになってきており (Bailey, M., Dunne, M. & Martin, G., 2000; Buhrich, N., Bailey, M. & Martin, G., 1991), 生物学的な多様性が示唆されている。インターセックスの場合と同様、性指向の多様性を無視した教育は、無知から生じる差別を生む。また、異性愛以外の性指向を持つ生徒自身が無用な不安を抱くことになる。

3) 性役割に関して、固定的な性役割観を見直すことに対して

内閣府の男女共同参画基本法の影響もあってか、固定的な性役割については、改変が求められている。行動遺伝学の知見では、典型的な性役割行動には、遺伝の影響が少なからずあることが示されている。この示唆は大きい。

つまり、われわれは男の遺伝子、女の遺伝子と単純に捉えやすいが、実

際はそうではなく、女性の中でも女性に典型的な行動をとる者、男性に典型的な行動をとる者、両方の役割をとる者、特にそういう傾向は見られない者などといった個人差がある。この個人差にこそ遺伝の影響が少なからずあるのである。「“XX 染色体だから女性に典型的な行動をとる”のではなく、“XX 型女性の中での典型的な女性役割行動の個人差の源泉には、相加的な遺伝の影響が見られる”」ということを示したことこそ、行動遺伝学の傑出した成果である。行動遺伝学が着目しているのは、比較行動学で扱う「種としての遺伝」ではなく、「個人差の遺伝」(安藤, 1992)なのだ。

生徒指導担当の教員が「今までは『男らしくしろ』と男子生徒を叱咤激励してきたが、それは性同一性障害を持つ男子生徒にはしてはいけないことなのだろうか」と言っていると聞いたことがある。その際、性同一性障害を持たないまでも、男らしさに対する生物学的偏りを生徒個人個人がもっているのだという視点を導入することが必要なのではないだろうか。

iii) ジェンダー・アイデンティティと遺伝と教育

「一人一人の異なった遺伝的性向があることは、人間の成長過程の中で、雑多な環境刺激の中からその固体独自の取捨選択をしてその個体の個性的な有能さを高めるのに大きく寄与しているはずであり、このような視点から遺伝的影響の性質を探求し教育的知見を得ることは、教育学的にもきわめて大きな意義があろう」と安藤(1992)は述べているが、ジェンダー・アイデンティティにおける“個体の個性的な有能さ”とは一体どういったことを指すのか興味は尽きない。

“ジェンダー・アイデンティティ”というテーマは、人が性的自己としてどう生きるのかという哲学的な問いを提供している。そこには、個人にとってよりのぞましい性的自己のあり方というものがおそらく想定されているのだろう。先行研究ではジェンダー・アイデンティティは、相対的に

環境の影響因が大きいということが明らかになっている。それを考えると、なおその自己形成は未知の要因に満たされているといえる。少なくともわれわれは、ジェンダー・アイデンティティを形作っていくことができるのだ。

教育が一方から一方への教示ではなく、相互作用しながら育んでいく過程だとすれば、影響を与える環境もまた、影響を与えられている。人が性的自己として成長していくことを支える相手もまた、影響を受けているのである。つまり、ジェンダー・アイデンティティの問題を、個人（遺伝）の問題に矮小化したりすり替えたりせず、社会の問題、環境の問題として扱う必要があると思われる。ジェンダー・アイデンティティを育むこと、育まれることは、とりもなおさず育む環境を問題化することである。働きかける他者の性的自己のありようについても問われているのだ。あなたは、どのようなジェンダー・アイデンティティを持っているのだろうか？ この、ある個人がジェンダー・アイデンティティを形成していく過程には、働きかける者と働きかけられる者との相互作用が必ず伴うことから、教育的な過程である。この意味で、ジェンダー・アイデンティティの場合は、ジェンダー・アイデンティティが不安定になりがちな遺伝的性向を持つ者に対して、「社会的、教育的制度を支えにそうならないところで踏みとどまろうと（安藤，2001）」させるのではなく、客体である社会的、教育的制度のほうこそが、主体の動きを受けて相互作用的に成長していく必要があると筆者は考えている。

冒頭の女装をする男性の話に戻る。性別適合手術を受けるにせよ受けないうにせよ、この人の生きにくさは“自分のジェンダー・アイデンティティを人々に認めてもらえない”という点にあると思われる。何故こんなことが起こるのか、自分の胸に手を当てて内省したい。「男か女かという性別二分法は、社会の根幹部分を構成しており、当面それを克服する手段は見当たらない（三井，2003）」という指摘は示唆的である。しかし、「人の

性に多様性があることは当然のことであり、その多様性こそが人間という存在に幅と深みを持たせてもいる（佐々木, 2005）」のだ。

さまざまな学問領域の統合によって解き明かされていく、生物学的なそして心理的社会的な性的自己形成メカニズムの研究は、今後、性別にまつわる教育観を大きく揺さぶっていくと思われる。

引用文献

- 阿部輝夫(1999) 性同一性障害関連疾患 191 例の臨床報告 —統計分析と今後の問題点— 臨床精神医学, **28**, 373-381.
- 安藤寿康(1992) 人間行動遺伝学と教育 教育心理学研究, **40**, 96-107.
- 安藤寿康(2001) 行動遺伝学の現状とその意味 生物科学, **53**, 5-18.
- Bailey, M., Dunne, M. & Martin, G. (2000) Genetic and environmental influences on sexual orientation and its correlates in an Australian twin sample. *Journal of Personality and Social Psychology*, **78**, 524-536.
- Bandura, A. (1977) *Social learning theory*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.
- Bem, L. (1993) *THE LENSES OF GENDER Transforming the debate on sexual inequality*. Yale University Press. (福富 護 (訳) 1999 ジェンダーのレンズ 性の不平等と人間性発達 川島書店)
- Berenbaum, S. A. & Bailey, J. M. (1998) Variation in female gender identity: Evidence from girls with congenital adrenal hyperplasia, tomboys, and typical girls. Paper presented at the meetings of the Midwestern Psychological Association, Chicago.
- Bradley, S. J., Oliver, G. D., Chernick, A. B. & Zucker, K. J. (1998) Experiment of nurture: Ablation penis at 2 months, sex reassignment at 7 months and a psychosexual follow-up in young adulthood. *Pediatrics*, **102**, 91-95.
- Buhrich, N., Bailey, M. & Martin, G. (1991) Sexual orientation, sexual identity, and sex-dimorphic behaviors in male twins. *Behavior Genetics*, **21**, 75-96.
- Bussey, K. & Bandura, A. (1999) Social cognitive theory of gender development and differentiation. *Psychological Review*, **106**, 676-713.
- Butler, J. (1990) *GENDER TROUBLE feminism and the subversion of identity*. Routledge, Chapman & Hall, Inc. (竹村和子 (訳) 1999 ジェン

ダー・トラブル フェミニズムとアイデンティティの攪乱, 青土社)

- Charatan, B. & Galef, H. (1965) A case of transvestism in a six-year-old boy. *Journal of the Hillside Hospital*, **14**, 160-177.
- Coates, S. (1990) Ontogenesis of boyhood gender identity disorder. *Journal of the American Academy of Psychoanalysis*, **18**, 414-438.
- Cohen-Kettenis, P. (1990) Perceived parental rearing style, Parental divorce and transsexualism: A controlled study. *Psychological Medicine*, **20**, 613-620.
- Colapinto, J. (2000) As nature made him: The boy who raised as a girl. New York: Harper Colins. (村井智之 (訳) 2000 ブレンダと呼ばれた少年, 無名舎)
- Coolidge, F., Thede, L. & Young S. (2002) The heritability of gender identity disorder in a child and adolescent twin sample. *Behavior Genetics*, **32**, 251-257.
- Diamond, M. (1982) Sexual identity, monozytic twins reared in discordant sex roles and a BBC follow-up. *Archives of Sexual Behavior*, **11**, 182-187.
- Diamond, M. (1996) Prenatal preposition and the clinical management of some pediatric conditions. *Journal of Sex & Marital Therapy*, **22**, 139-147.
- Diamond, M. & Sigmundson, K. (1997) Management of intersexuality: Guidelines for dealing with individuals with ambiguous genitalia. *Archives of Pediatrics and Adolescent Medicine*, **151**, 1046-1050. (針間克己 (2000) インターセックスの子どものためのマネージメントガイドライン 助産婦雑誌, **54**, 125-131.)
- Ehrhardt, A. A. & Baker, S. W. (1974) Fatal androgens, human central nervous system differentiation, and behavior sex differences. In R. C. Friedman, R. M. Richart & R. L. Vande Wiele (eds.), *Sex differences in behavior*. New York: Wiley.
- Freud, S. (1905) 性の理論に関する三つの論文 (安田徳太郎・安田一郎 (訳) 1957, 世界性学全集 第2巻 性と精神分析, 河出書房新社 7-107)
- Freud, S. (1925) 解剖学的な性の差別の心的帰結の二三について (懸田克躬・吉村博次 (訳) 1969, フロイト著作集第5巻, 人文書院 161-170)
- Gooren, L., Cohen-Kettenis, P. T. (1991) Development of male gender identity/role and a sexual orientation towards women in a 46, XY subject

- with an incomplete form of the androgen insensitivity syndrome. *Archives of Sexual Behavior*, **20**, 459–470.
- Green, R. (1974) Sexual identity conflict in children and adults. New York: Basic Books.
- Green, R. (1987) The “sissy boy syndrome” and the development of homosexuality. New Haven, CT: Yale University Press.
- Green, R. (2000) Birth order and ratio of brothers to sisters in transsexuals. *Psychological Medicine*, **30**, 789–795.
- 東 優子 (2003) トランスジェンダーと性別と医療 思想読本〔10〕“ポスト”フェミニズム 竹村和子 (編), 作品社
- Hines, M., Ahmed, S. & Hughes, I. (2003) Psychological outcomes and gender-related development in complete androgen insensitivity syndrome. *Archives of Sexual Behavior*, **32**, 93–101.
- Hines, M. (2004, a) Androgen and psychosexual development: core gender identity, sexual orientation, and recalled childhood gender role behavior in women and men with congenital adrenal hyperplasia. *Journal of Sex Research*, **41**, 75–81.
- Hines, M. (2004, b) *Brain Gender*: Oxford University Press.
- Imperato-McGinley, J. (1979) Androgens and the evolution of male gender identity among male pseudohermaphrodites with 5 alpha reductase deficiency. *New England Journal of Medicine*, **300**, 1233–1237.
- Hyde, C. & Kenna, J. C. (1977) A male MZ twin pair, Concordant for transsexualism, discordant for schizophrenia. *Acta Psychiatrica Scandinavica*, **56**, 265–275.
- Kinsey, A. (1948) *Sexual Behavior in the Human Male*. W. B. Saunders Co.
- Kinsey, A. (1953) *Sexual Behavior in the Human Female*. W. B. Saunders Co.
- Knafo, A., Lervolino, A. & Plomin, R. (2005) Masculine girls and feminine boys: genetic and environmental contributions to atypical gender development in early childhood. *Journal of Personality and Social Psychology*, **88**, 400–412.
- Kohlberg, L. (1966) *A cognitive-developmental analysis of children's sex role concepts and attitudes*. In E. E. Maccoby (ed.), *The development of sex differences*, Stanford, Calif.: Stanford University Press. (池上千寿子・河野貴代美 (訳) 1979, 性差 その起源と役割, 家政教育社) 131–253.
- Kruijver, F., Zhou, J., Pool, C., Hofman, H., Gooren, L. & Swaab, D. (2000) Male

- to female transsexuals have female neuron numbers in a limbic nucleus. *The Journal of Clinical Endocrinology & Metabolism*, **85**, 2034-2041.
- Masia, D. N., Money, J. & Ehrhardt, A. A. (1971) Fetal feminization and female gender identity in the testicular feminizing syndrome of androgen insensitivity. *Archives of Sexual Behavior*, **1**, 132-142.
- Marantz, S. & Coates, S. (1991) Mothers of boys with gender identity disorder: A comparison of matched controls. *Journal of the American Academy of Child and Adolescents Psychiatry*, **30**, 310-315.
- McDermid, A., Zucker, J., Bradley, J. & Maing, M. (1998) Effects of physical appearance on masculine trait ratings of boys and girls with gender identity disorder. *Archives of Sexual Behavior*, **27**, 253-267.
- Mendez, J. P. (1995) Malepseudohermaphrodites due to primary 5 alpha reductase deficiency: Variation in gender identity reversal in seven Mexican patients from five different pedigrees. *Journal of Endocrinological Investigations*, **18**, 205-213.
- Meyer-Bahlburg, H., Dolezal, C., Baker, S., Carlson, A., Obeid, J., & New, M. (2004) Prenatal androgenization affects gender-related behavior but not gender identity in 5-12 year-old girls with congenital adrenal hyperplasia. *Archives of Sexual Behavior*, **33**, 97-104.
- Mischel, W. (1966) A social learning view of sex differences in behavior. In E. E (ed.), *The development of sex behavior*. Stanford, CA: Stanford University Press.
- Mischel, W. (1970) Sex-typing and socialization. In P. Mussen (ed.), *Carmichael's manual of child psychology* (vol. 2). New York: Willy.
- 三井宏隆 (2003) ボディ・セルフ・アイデンティティ・セクシュアリティの心理学—「私が変わる」「私を変える」「社会が変わる」— ナカニシヤ出版.
- 文部省 (2000) 学校における性教育の考え方, 進め方, ぎょうせい.
- Money, J., Hampson, J. G. & Hampson, J. L. (1957) Imprinting and the establishment of gender role. *Archives of Neurology and Psychiatry*, **77**, 333-336.
- Money, J. (1965) *Sex Research; New Developments*, Holt, Rinehart and Winston, New York.
- Money, J. & Ogurno, B. (1974) Behavior sexology: Ten cases of genetic male intersexuality with impaired prenatal and pubertal androgenization. *Archives of Sexual Behavior*, **3**, 181-205.
- Money, J. & Tucker, P. (1975) *Sexual signatures: on being a man or a woman*.

- Little, Brown & Company. (朝山新一ほか (訳) 1979 性の署名: 問い直される男と女の意味, 人文書院)
- Money, J. (1995) *gendermaps continuum*.
- Money, J. (2002) A first history of Pediatric Psychoendocrinology Perspectives in Sexuality series. Behavior, Research, and Therapy (Green, R. (ed.)).
- Mulaikal, M., Migeon, J. & Rock, A. (1987) Fertility rates in female patients with congenital adrenal hyperplasia due to 21-hydroxylase deficiency. *New England Journal of Medicine*, **316**, 178-182.
- Munsinger, H. & Rabin, A. (1978) A family study of gender identification. *Child development*, **49**, 537-539.
- Perry, G. & Bussey, K. (1979) The social learning theory of sex difference: Imitation is alive and well. *Journal of Personality & Social Psychology*, **37**, 1699-1712.
- 佐々木 掌子 (2005) 性をめぐるストレス 伊藤美奈子 (編) 学校全体で取り組む “子どものチカラ” 向上作戦! 第5巻 ストレスに負けない心を育てる学校の取り組み 教職研修 2月号増刊 教育開発研究所, 58-63.
- 佐藤俊樹, 岡部伸幸, 太田順一郎, 大西 勝, 大谷恭平, 氏家 寛 (2003) 性同一性障害の双生児例, 同胞例臨床精神医学, **32**, 1419-1424.
- Sedehghi, M. & Fakhrai, A. (2000) Transsexualism in female monozygotic twins: a case report. *Australia and New Zealand Journal of Psychiatry*, **34**, 862-864.
- Spence, J. T. (1985) Gender identification and its implications for masculinity and femininity. In T. B. Sonderegger (ed.), *Nebraska symposium on motivation and achievement: Psychology and Gender*, **32**, 59-95. (森永康子・青野篤子・福富 護 (監訳) (2004) 女性とジェンダーの心理学ハンドブック 第6章 ジェンダー化されたアイデンティティを考える 土井晶子 (訳), 北大路書房)
- Stoller, R. J. (1977a) Primary femininity. *Female Psychology* (Blum, H. P. (ed.)) International University Press, New York.
- Stoller, R. J. (1977b) Gender Identity. *International Encyclopedia of Psychiatry, Psychology, Psychoanalysis, and Neurology*, **5**, 173-177.
- Stoller, R. J. (1976) Two feminized male American Indians. *Archives of Sexual Behavior*, **5**, 529-538.
- Swaab, D., Gooren, L. & Hofman, M. (1992) Gender and sexual orientation in re-

- lation to hypothalamic structures. *Hormone Research*, **38**, 51–61.
- Rekers, A., Mead, L., Rosen, A. & Brigham, L. (1983) Family correlates of male childhood gender disturbance. *Journal of Genetic Psychology*, **142**, 31–42.
- Reiner W. G. & Gearhart J. P. (2004) Discordant Sexual Identity in Some Genetic Males with Cloacal Exstrophy Assigned to Female Sex at Birth. *New England Journal of Medicine*, **350**, 333–341.
- Roberts, W., Green, R., Williams, K., & Goodman, M. (1987) Boyhood gender identity development: A statistical contrast between two family groups. *Developmental Psychology*, **23**, 544–557.
- Thigpen, A. E., Davis, D. L., Milatovich, A., Mendonca, B. B., Imperato-McGinley, J., Griffin, J. E., Francke, U., Wilson, J. D. & Russell, D. W. (1992) Molecular genetics of steroid 5 alpha-reductase 2 deficiency. *Journal of Clinical Investigation*, **90**, 799–809.
- Tsoi, F. (1990) Parental influences in transsexualism. *Singapore Medical Journal*, **31**, 443–446.
- Wolfe, M. (1990) Psychopathology and psychodynamics of parents of boys with a gender identity disorder. Unpublished doctoral dissertation, City University of New York, New York.
- Zucker, K. J. & Green, R. (1992) Psychosexual disorders in children and adolescents. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, **33**, 107–151.
- Zucker, K. J. & Bradley, S. J. (1995) Gender identity disorder and psychosexual problems in children and adolescents. New York/ London: Guilford Press.
- Zucker, K. J., Green, R., Coates, S., Zuger, B., Cohen-Kettenis, P. T., Zecca, G. M., Lertora, V., Money, J., Hahn-Burke, S., Bradley, S. J. & Blanchard, R. (1997) Sibling sex ratio of boys with gender identity disorder. *Journal of Child Psychological Psychiatry*, **38**, 543–551.
- Zucker, K. J., Lingham, S., Pecore, K., Bradley, S. J. & Blanchard, R. (1998) Birth order in girls with gender identity disorder. *Europe Child and Adolescent Psychiatry*, **7**, 30–35.
- Zucker, K. J. (1999) Intersexuality and gender identity differentiation. *Annual of Review of Sex Research*, **10**, 1–69.